

くにきゅうせき
 史跡 恭仁宮跡（山城国分寺跡）
 令和6年度の発掘調査成果（第106次調査）

1. 恭仁宮について

みかのほら
 京都府と奈良県の境に近い木津川市加茂町の瓶原地域には、現在美しい田園風景が広がっています。ここに、天平12年（740）、聖武天皇によって恭仁宮が造営され、平城京から都が遷されました。恭仁宮では「墾田永年私財法」が定められるなど、歴史上の重要な舞台となりました。現在、恭仁宮跡及び山城国分寺跡は国史跡に指定されています。

2. 恭仁宮の範囲

昭和48年度から続く発掘調査によって、恭仁宮や山城国分寺の姿が次第にわかりつつあります。恭仁宮の範囲は東西約560m、南北約750mの規模で、「大垣」と呼ばれる大規模な築地塀に囲まれていました。宮内の施設の区画も、裏面の図のように明らかになりました。

3. 平城宮から恭仁宮、山城国分寺へ

しよくにほんぎ
 『続日本紀』によると、恭仁宮の大極殿と大極殿院の回廊は、平城宮から移築したとされています。天平13年（741）には、恭仁宮で「国分寺こくぶんじ建立の詔」が発せられました。

都が平城宮に戻ったのち、天平18年（746）に恭仁宮大極殿は山城国分寺の金堂（仏像を祀る建物）として施入されることとなりました。

山城国分寺は、南北約330m（3町）、東西約273m（2.5町）が築地塀で囲まれており、全国的に見ても屈指の広さの国分寺であったことがわかっています。これまでの発掘調査で、金堂や七重塔、僧房のほか、鍛冶工房跡、瓦窯など寺を支えた施設が見つかっています。



山城国分寺跡の復原CG（木津川市教育委員会提供）

大規模な礎石建物跡を検出

今回の調査では、礎石2基と、礎石抜取穴9基を、東西4間分(13.2m)、南北2間分(6.0m)検出しました(写真1)。礎石は直径0.5~0.7mと巨大なものです(写真2・3)。周辺で8世紀後半の瓦が多く見ついていることから、恭仁宮に伴う建物ではなく、古代の山城国分寺に関わる礎石建物跡と考えられます。

今回の調査地の約20m南側で実施した平成11年(1999)の調査では、礎石建物跡1棟と、北に延びる廊下状の遺構が見ついています。今回見つかった礎石建物跡と柱筋が揃うことから、2棟の建物は連結していた可能性があります(図3)。

これらの建物の中心は南北に揃っていたと考えられるため、今回見つかった礎石建物は桁行11間、梁行2間で南北2面の廂をもつ、南北約12.0m、東西約38.1m大規模な建物に復元できます。

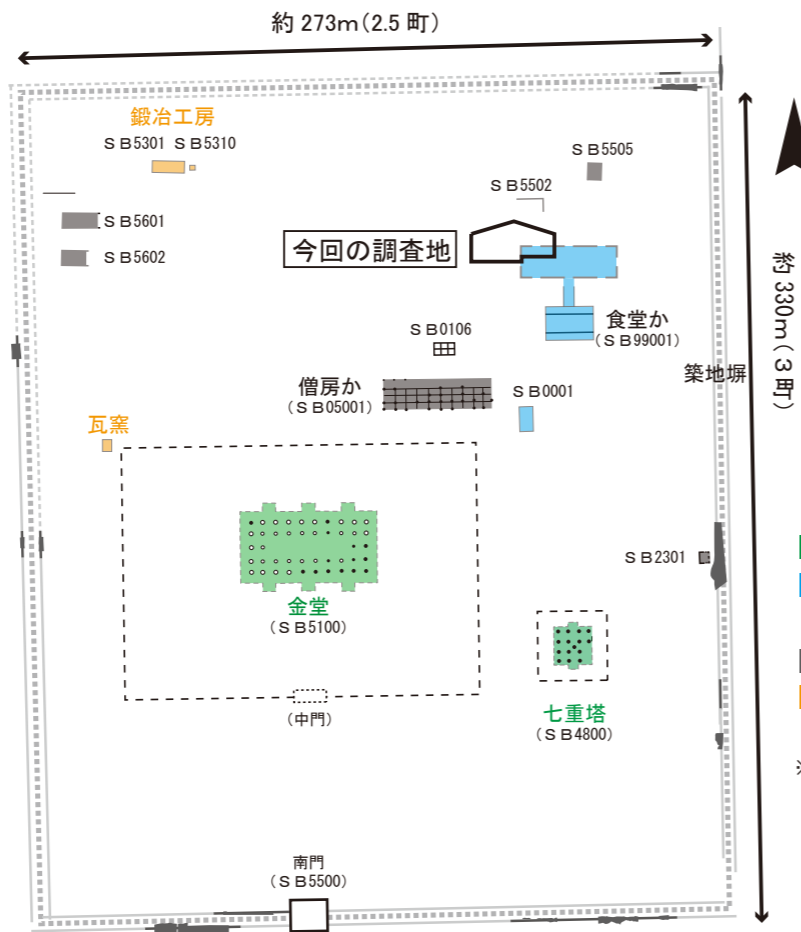


図1 山城国分寺跡全体図 (S=1/3,000)

食堂に関連する建物が

今回見つかった建物は、山城国分寺の寺域内では東北部にあたり(図1)。南都(奈良)の大寺院や各地の国分寺の類例では寺域東北部に「食堂」が置かれることが多く、今回見つかった建物も食堂か、それに関連する建物と考えられます。

食堂とは、寺で修行する僧侶たちが、儀式的に食事を共にするなどして集団の連結を高めた建物のことです。関連施設をあわせて「食堂院」とよびます。

東大寺や西大寺、興福寺などの南都の大寺院では、複数の建物が南北に並ぶ食堂院がみついています。山城国分寺跡でもこれらの大寺院とおなじ、南北2棟が廊下でつながった構造の、大規模な食堂院が存在した可能性が高まりました。

また、桁行11間、梁行2間の二面廂付という規模は、建物だけで比べると東大寺や薬師寺にも匹敵する規模で、全国の古代寺院の食堂としては、最大級の規模です。

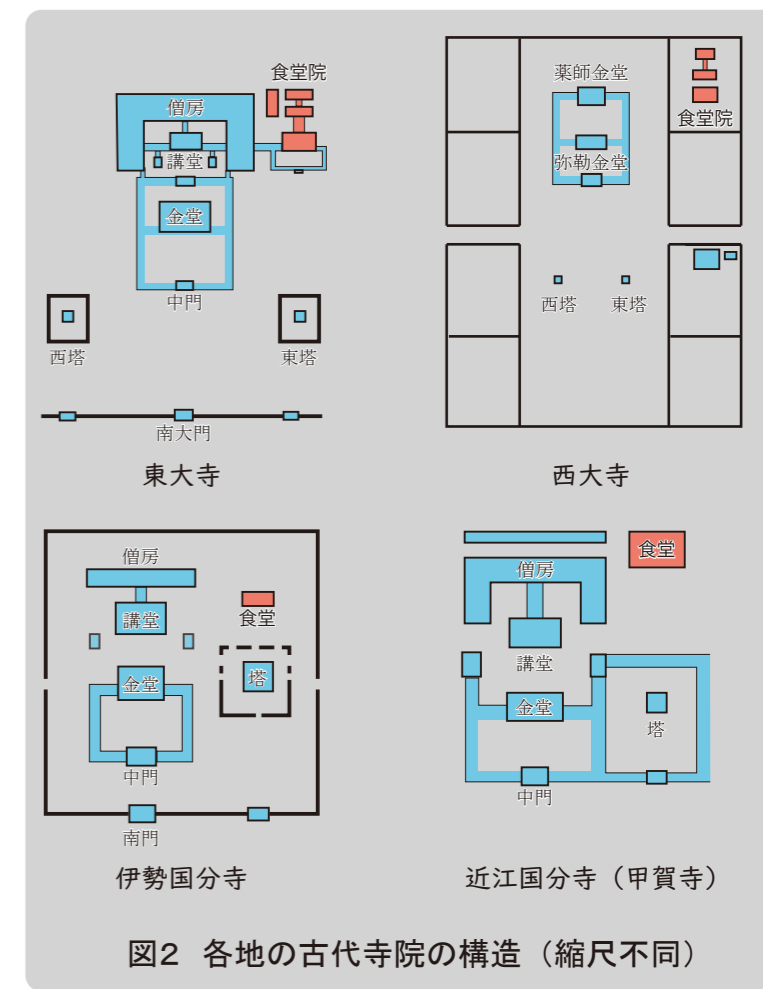


図2 各地の古代寺院の構造 (縮尺不同)



写真1 遺構検出状況 (上が北)



写真2 礎石建物と建物を囲む溝 (北西から)



写真3 礎石と礎石を抜き取った穴 (南西から)

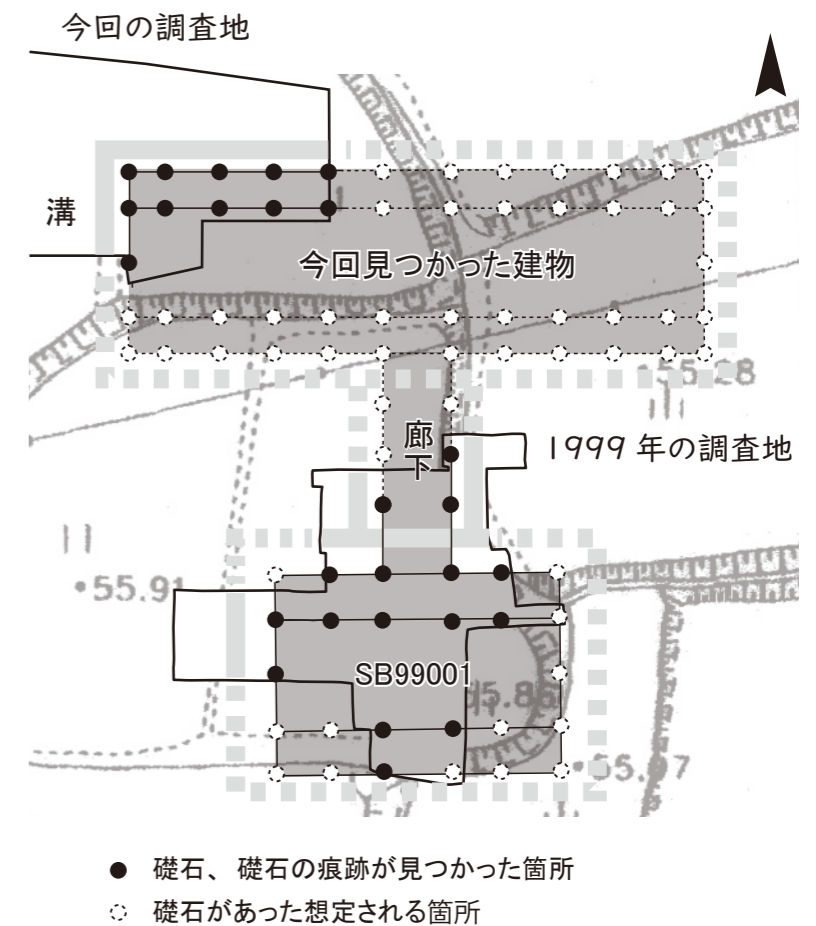


図3 山城国分寺跡の食堂院に関わる建物群 (S=1/500)